

第11回東南アジア分科会 議事録

日時： 2009年1月6日(火) 15時30分～18時

場所： 東京文化財研究所 第一会議室

出席者： 上野邦一、柴山守、友田博通、桃木至朗(以上、東南アジア分科会委員)、重枝豊(特別報告)、田中健太郎(以上、文化庁伝統文化課)、金田、海老原周子(以上、国際交流基金)、橋本奈津子(以上、外務省)、清水真一、二神葉子、友田正彦(以上、東京文化財研究所)青木繁夫、豊島久乃、田代亜紀子、小角裕子(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

1. ミーソン遺跡と博物館棟の建設について

重枝豊(日本大学)

報告: ベトナムのミーソン遺跡の博物館棟建設について報告する。博物館の展示スペースは3つに分けられており、最初のスペースではチャンパ建築の特徴が述べられている。チャンパ建築は、レンガを擦り合わせて造り、積み上げてから彫刻が施されている。開口部は石材とレンガを組み合わせて造っている。カンボジアのプレ・アンコール期との共通点も見られる。チャンパ初期の建築、カンボジアの初期の建築、インドネシア初期の建築についてもきちんと研究を進めるべきではないかと考えており、始めているが、費用も時間かかっている。しかし、この3地域の初期の建築を見れば、東南アジアのヒンドゥー化をめぐる問題はもう少し分かりやすくなるだろうと思われる。それについては別の機会に話したい。

ミーソン遺跡群はA、B、C、D、Eの5グループに分けられ、これらは発掘時につけられた呼称である。図面をみると、それらの配置の軸線がばらけていることから、同時期に作られたものではないことが明らかである。装飾をはじめ様々な点から考えて、初期の段階では周壁が無く、各祠堂が単独で建てられ、それを巡礼して回るというのがミーソンの原型であったらと考えられる。そして9世紀半ば以降から、周壁が造られるようになる。こうした変遷を一つ一つ検証するには非常に丹念な作業が必要になるが、これまでにいくつかの整理はできた。展示室にはミーソン A1 といって、米軍の爆撃で崩壊した建物の写真が日本の技術で拡大され、展示されている。訪問者は、自分達がどこにいるのか、どういうところを訪ねようとしているのかということをご自分でイメージする。また、どのような場所にチャム人たちが聖地を作っているのかということをご明らかにするのが最初のスペースである。ここに多くの彫像を配置したいというのがベトナム側の強い意思であったが、彫像は遺跡の中に物置くのであって展示はしないことでベトナム側は納得した。また、建造物の木造部分を復元した。また、地形図も展示している。展示されている鞘堂では、碑文と説明文を展示した。この鞘堂については、大体の復元案を作成し、実際はチャム人に作業をお願いした。この作業は撮影され、ビデオ映像が記録して残っている。建物は、ほぼ外部仕様で、雨に濡れても大丈夫なように最初から作ってある。展示棟、作業研究棟、事務員研究棟がある。

以上、概略をお話したが、現地の人々がいかにチャンパの文化と上手く関係していけるかというツールやデータは全てベトナム側に提供している。また、パンフレットのデータも作成した。さらに少し手を入れれば、この日本の協力により建設された博物館が、今後初めてミーソンを訪れる人たちにとって非常に印象的なものとなると思う。

・ミーソンへの観光客は何人くらいなのか。

→ 世界遺産リストに登録されてから、最初の年で3倍、次の年で5倍、その次の年で約7倍に増加している。それ以降のデータはベトナム側も公開していない。ベトナム側と協力して何かしていくのは非常に難しいが、現在日本の若手ベトナム研究者のなかにはベトナム化しているものも多くいる。それら若手をプロジェクトにうまく取り込んでいくことも必要である。

・博物館の建物には、空調等は全くないのか。

→ 全くない。電気は一応きているが、いつ切れるか分からない状態である。外部仕様なので、水が漏れても少なくとも十数年、もしくは20年くらいは大丈夫だと思う。

・日本でもその傾向があるが、ベトナムでも博物館展示の際に、何が並んでいるのかわからないほど物を展示してしまうのではないか。

→ ベトナムのいくつかの博物館ではそのような状態になっている。故にタンロンを支援するなら、きちんと整理された展示設備にするよう支援するべきである。

2. タンロン皇城遺跡保存に関わる協力について

2-1. タンロン皇城遺跡保存に関わる(2008年10月以降)報告

友田正彦(東京文化財研究所)

報告:2008年10月の東南アジア分科会以降のタンロン皇城遺跡に係る協力について報告する。まず、ベトナム政府は9月にユネスコに対しタンロンの世界遺産申請をおこなっている。この申請書に関しては草案時点でベトナム側から日本側専門家へ意見が求められており、上野先生がコメントを返しているが、これがどれくらい反映されたかどうかは不明である。申請書では、タンロン遺跡の中心軸部分、もともと軍管理だった地域、発掘が行われている18番地と国会議事堂を含む地域のみが申請されており、タンロン皇城全域の申請ということではない。また、バッファゾーンについては、中心軸の片側、つまり西側しか設定されていないという、草案段階からあった問題が修正されずに提出されたようである。申請書は11月の国際ワークショップで掲示されおり、これについてのユネスコ側のコメントはまだないようである。

次に、考古学院主催タンロン皇城遺跡に関する国際ワークショップが11月23日から25日までハノイで開催された。このワークショップには、井上先生、上野先生、桃木先生が招聘され、うち桃木先生は都合がつかないということで、井上先生、上野先生、友田が出席した。井上先生は、タンロン遺跡の発掘遺構、A区・B区、そしてD区の4から6という出土発掘区域に関しての、分析結果を報告なさり、上野先生は、この遺跡で見られる帯状の遺構についての考察を発表された。このワークショップは非常に大規模なものであり、発掘で何が出土して何が分かったのかということについての情報共有の場としては非常に意義があったと考える。また、18番地に関しては、ベルギーのワロン地域州政府、それからフランス極東学院がこれに関して支援の用意があるということをおこのワークショップにおいて表明しており、そういった諸外国とも調整する必要がでてくると考える。加えて、12月4日から7日には、同じくハノイにおいてベトナム学国際会議が開催されている。この会議には、上野先生、柴山先生、坪井先生、桃木先生が参加しており、この会議については後ほどご紹介いただく。

日本政府から供与された気象観測の機材、金属遺物の保存・処理機材が18番地の現地事務所にあります。この気象観測機材については、順調に稼働していて、計測データが日本側に提供されている。金属遺物処理機材については、研修はまだ行ってないが、ベトナム側は現場の判断で必要なものは既に使用しているとのことである。機械の具合も問題なく、いまのところ故障もないとのことである。

新国会議事堂については、移転案があったのだが、そのまま現場に建て替えをするという決定がなされ、もともとの敷地から北側と東側、即ち発掘区の側に20mずつ拡大するということが最終的に決着がついているとのことである。現在敷地では大々的に発掘調査がなされているが、情報はない。ワークショップでも議事堂敷地内に関しては一言も触れられなかった。A区、B区、そして以前から発掘されている部分に関しては、みた限り変化はないようである。一方、中心軸部分、つまり18番地遺跡からみると、道を挟んで東側であるが、この部分については、イル・ド・フランスが派遣した専門家によって調査及び計画策定というものが2008年秋になされている。基本的にはグエン朝期から植民地時代にかけての建物はほぼ残して、それより後の建物についてはベトナム戦争関係等で意義のあるものは残すとのことだった。予定では、2009年1月中旬に工事が完了するとのことである。残した建物については、出土遺物等の展示館などに活用する案がある。北側と南側に軍が使っている敷地があり、この部分も順次移管をしていくことになっていて、少なくとも2010年10月の千年記念式典を行うまでには旗台との間にある軍の施設を移転すると聞いている。

・中心軸の建造物については残す方針か。

→ 中心軸にあるベトナム戦争後の建造物のいくつかについては、軍の歴史にとって重要であるので残すことを前提にコア・センターへ移管される予定であると聞いている。

2-2. 国際ワークショップおよび国際会議報告

上野邦一(奈良女子大学)

報告: 11月23日から29日に開催された国際ワークショップについて報告する。今回は、国際交流基金の派遣ということで参加・発表させていただいた。また、続けて12月のベトナム国際会議にも参加した。

国際ワークショップは、過去5年間のタンロン調査の成果を確認する、といった趣旨であったようだ。ワークショップ中はプログラムが急遽変更されたり、発表時間が短縮されたりしており、そのなかでもどうにか井上氏、上野は比較的発表時間を与えられた。エクスカーションでは、18番遺跡のA区、B区の見学がおこなわれた。また、少し離れたところのファットティッチ、タンロン遺跡の少し古い都城と言われるコーロアを訪問した。24日にはセレモニーがおこなわれ、賓客の挨拶があり、その後ベトナム考古学院のトン・チュン・ティン氏から考古学院による発掘報告があった。その後、井上氏からは遺構の時期分け、分析、尺度などについて発表された。その後、私からは、当初ベトナム側が道といっているものが実は堀である、ことを示す内容を発表した。その後グエン・フォン・キエン氏という方が、建築の様相について発表したが、残念ながらキエン氏とは私も井上氏も全く意見交換することがなかった。また、西村昌也氏からの発表もあったが、西村氏は我々が堀と考えているものを道と考えているので、我々とは見解の違いがある。その後にも、ワークショップでは孔子廟の比較研究、文様の比較研究などが発表されたが、あくまでもどのような文様があるかの報告のみであったことが残念である。発表2日目は、考古学院のブイ・ミン・チー氏から出土陶磁器の報告がありこれは非常に興味深いものであった。また、ベトナム古地図の分析についても発表があった。最後には、ベルギーのワロン地方政府とフランス極東学院から中心軸の保存計画について発表がおこなわれたが、これは非常に現状を理解していない内容であったと思う。それから、タンロン千年という認識は、ベトナム全体に浸透しているわけではないことがわかった。また、ワークショップには中国人研究者を招聘すると聞いていたが、残念ながら今回中国人研究者の参加はなかった。

補足説明

井上和人(奈良文化財研究所)

報告: ベトナム側は日本チームが伝えた測量技法をもって図面を作り上げており、外務省草の根文化無償で供与された測量機材がその面で非常に活用されている。上野先生の報告にもあったが、ワークショップでは2日間で42本の報告がなされており、非常に厳しいスケジュールのワークショップだった。しかし、初めて遺構の具体的な内容が社会的に示された点では大きな意義を持っている。これを基礎に、これから検討していける環境が整えられたと理解している。フランスによる発表については、遺跡にとって望ましくない事態が懸念されるような内容であったと思う。

補足説明

桃木至朗(大阪大学)

報告: 12月に開催されたベトナム国際会議について報告する。これはベトナム研究であれば何でもありの、参加者約700名、うち約120名が外国人という、年に二回開催の大きな国際会議である。今回の会議は全19セッションからなり、政治、経済、宗教、音楽、文化、芸術等である。そのなかでタンロン研究は、地域研究のセッションに振り分けられ、ハノイ研究、ホー・チ・ミン市の研究、南部の研究などと並んで位置づけられた。そこで、上野先生、私、広島大の八尾先生、それから、チャムのカオ・フィアン(?)先生、トン・チュン・ティン氏さんなどのベトナム側からの報告があった。発表と討議が予定されていたが、セッション終了後は、研究者に対する大統領官邸への招待があり、討議ができなかった。しかし、今回の会議では文献史学に非常に大きな収穫があったと思う。セッションでは、京都大学の柴山先生による報告があり、上野先生からの遺跡出土物について総合的な報告に続いて、私と八尾さん、ベトナムのファン・ヒー・レ先生が、文献の見直しについて報告した。従来ベトナムは漢字を廃止しているが、記録は漢字で書いてある。それを現代語に訳したものを使って研究をしていくというのが当然となっており、実際ファン・ヒー・レ先生が出土遺物について書かれている論文等が、訳本に依拠したために間違っているということが明らかになっていた。これを指摘したところ、ファン・ヒー・レ先生は事前に私の論文を手に入れて、反論論文を出している。それについては従来の概説を刷新するものであった。ひとつ紹介すると、禁城というのがどこからどこまで、皇城はどこからどこまでだったのか、という議論はベトナムでは訳本に依拠しており、また、フエでの知識のみで議論しているという問題がある。

・大統領から招待はどのような経緯か。

→ わからないが、大統領は参加研究者に会うために2日間ほど時間をとったと聞いている。どのような選定か、日本人以外にもいろいろな国の人々が集められていた。1時間ほど大統領がいろんな人々を紹介してくれた。

・11月の国際ワークショップはどこが主催しているのか。

→ 社会科学院が主催している。基本的にタンロンの専門家が集まるものである。

3. フランス極東学院からの CISARK 協力依頼について

田代亜紀子(文化遺産国際協力コンソーシアム事務局)

報告:フランス極東学院とはフランスの高等研究所の下にある、インドから中国、東南アジアを含めた人文社会科学の国立研究所である。日本も含め、現在 12 カ国に支部がある。カンボジアでも活発に研究活動を行っており、2008 年 12 月末に日本大学が開催したアンコールの王道に関するシンポジウムに際して、フランス極東学院研究員ブルーノ・ブルギエ博士が招聘され、ブルギエ氏より、フランス極東学院プノンペン支部がおこなっている CISARK というプロジェクトに対する協力依頼があった。

CISARK とは、カンボジア、ベトナム、ラオス、タイにまたがるアンコール王朝期の遺跡に関する情報をデータベース化し公開するプロジェクトである。1990 年にカンボジアの文化芸術省の協力のもとフランス極東学院により実施され、2007 年に完成した。CISARK にはブルギエ氏が 1999 年に刊行したアンコール遺跡関連の文献目録データと、フランス極東学院が所蔵する古写真、ブルギエ氏が現地調査により作成したカンボジア国内遺跡インベントリーの情報が入力され、ウェブ上で公開されている。一般情報より詳細な専門的情報が必要な場合は、所定の手続きにそいログインし、パスワードを発行してもらい閲覧することができる。この CISARK について、ブルギエ氏から日本に対し 3 つの依頼があった。まず、日本が現在まで蓄積しているアンコール研究の一部として持っている各遺跡の図面や測量データなどの提供。2 つ目は、日本において刊行された報告書や文献の情報、3 つ目は GIS などの技術での協力要請である。特に GIS 分野については日本側の協力をいただけないだろうか、という話があった。1 つ目の依頼については、現在はブルギエ氏が個人で連絡をとって、図面提供などについて依頼している。しかし、これは日本側で一つのを、連携してまとめ、CISARK に提供できたらよいのではないか、という提案があった。

しかし、CISARK へ情報を集中していくことにより、日本側の協力がほとんど表に出ないままフランス極東学院の成果となっていく可能性もあるので、その点を踏まえて3つの提案をおこないたい。1 つ目の提案は長期的計画で、現在 CISARK がデータをほとんど入力していない東北タイもしくはラオスのアンコール王朝期遺跡についてのインベントリーを作成し、CISARK、とリンクさせていく。2 つ目は、まずは日本側がこれまでどのような研究をおこなっており、どのような種類のデータが集まってきているかを把握するためにも、日本側でデータを収集しデータベース化する。それを CISARK にリンクさせていく協力。3 つ目は、CISARK に日本の協力がみえる形で技術協力をおこなうことである。先生方のご意見をうかがいたい。

・要するに遺跡のデータベースを日本と協力して充実していきたいという話だが、皆さんの意見をいただきたい。

補足説明

柴田守(京都大学)

・研究成果の情報蓄積あるいは公開という問題は、なかなか難しく、技術的には簡単だが、そうしたものを作って、世に公開していくところに難しさがある。そういった点からすると、むしろ、内容も含めて国家的とまでは言わなくても、組織立って、日本の存在と世界に対する貢献をきちっとした格好で出していくことを考えなければならない。今やインターネットの時代でウェブがこれだけ盛んになってきていると、こうしたメディアを使って海外に公開をしていくという重要性は、特にこのコンソーシアムでは重要だと感じている。具体的には、世界の遺産あるいは文化・歴史分野での情報の公開は、現実的にハイテク技術はあるものの、実施の段階で先立つものが問題となり、また、誰がリードするのかということが問題となる。アンコール遺跡での日本の協力は東南アジア全体における文化遺産の保存の問題とも併せて、できればそうした日本の活躍を軸に公開していくような方針をきちっと立てることが大事ではないかと思う。日本学術会議の研究委員会でも同じような議論があり、日本の世界に対する貢献は、国内の情報も含めて情報資源化されていないという問題もあるので、このような視点も含めてぜひともこの情報資源化に取り組んでいただければありがたいと思う。

アジアあるいはヨーロッパの遺跡に関する情報学の視点からの研究は様々なところでやっているが、数も内容も限られている。そうした視点からいくと、関係者が一度集まって情報交換する機会があればよいと思う。例えば東京大学の空間情報科学研究センター、NII 国際情報学研究所、デジタル・シルクロード、民族学博物館、CAD センター、立命館大学など、関連する機関は情報学の分野では多くある。そのような人々が一同に会し、コンソーシアムの活動を軸にしながら、情報学の視点からどういったことができるのか議論することには価値がある、と感じている。

・確かに簡単に答えの得る問題ではない。先ほどの CISARK に対する 3 番目の技術協力、例えばグーグル・アースやグーグル・マップのようにきれいなものを作りたい、ということはお金で解決できるのかもしれないが、そこは非常に議論の要するところである。

・いずれにしても蓄積された研究とその情報公開に関する問題だけで意見交換会というか、議論をもう少しきちんと行う場が必要であると思う。

・中・長期的な計画とは別に、日本が既におこなっている研究データについて、一定の窓口を作ってオーソライズしてくれると非常に助かると、そういった役割をコンソーシアムに期待できないか、という相談があった。

・エジプトにもこのような CISARK のようなシステムがある。情報の正しさも含めて、いろいろ問題があるので、もしこの問題を考えるとなると予算の問題も含めて、学会を作るような勢いでやらないと、多分かなり厳しいと考える。まずきちんと議論する場が必要である。特にデータの信憑性ということも含めて考えると、かなり議論の余地を残している問題である。

・いずれにしても、この問題は簡単に結論がでるものではないということが分かった。コアメンバーみたいなものをつくり、意見交換会をどうするかということを決めないといけないと思う。東南アジア分科会のもと、関わりの深い方に集まって頂いて、議論することにしたい。

4. その他

・2008 年 11 月にドンナム村で、在ベトナム日本大使にお会いした折、ホイアン世界遺産登録 10 周年記念して毎年実施してきたホイアン祭りを開催する予定であること、日本からなるべく多くの方に参加してもらいたいので、ご協力をよろしくという話があった。日程は、現在 8 月 14～16 日と聞いている。昭和女子大学としてもできれば国際シンポジウムを合わせてやりたいと考えている。皆様にも何らかの形でご参加いただけるとありがたい。（昭和女子大学 友田博通）

・2009 年 1 月 18 日開催の文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム「私の文化遺産再発見」に関するお知らせ（文化遺産国際協力コンソーシアム事務局）

以上